

# 序

章

高齢化社会が求める  
医療機器

## 過去を引き合いに現代医療を考える

現在の「医療」を俯瞰するとき、第三者的な目で見たらどう映るのか、という単純な設問を作ってみた。

この種の総論的な質問に答えるには、一つの切り口を設定するのがよいかも知れない。たとえば、時間的な変化というのも一つ。つまり、半世紀前と現在の比較というような手がある。

そこで、過去の状況を思いつくままにあげてみる。

その昔、病気の診断には聴診器が主役であり、それが医師の仕事の代名詞・トレードマークであった。今でも、医師の画像を検索すると、聴診器を首にかけた画像がでてくる。その当時、簡単なX線検査、血液検査などは行われていたが、大病院といっても平屋がほとんど。高校生のとき血液検査だけで「虫垂炎」と診断され、下腹部切開の手術を受けた経験がある。手術室などという大げさなものでなく、普通の病室だった。

小中学校での健康診断は身長と体重、それに検便、ときには肺活量測定などがあった。全学童に向けて、天然痘予防のために種痘の接種も行われていた。種痘を受ける上腕の接種部がただれ、必ず痕跡が残る。今なおその爪痕を残しているのは、40代後半以上の人た

ちだろう。というのは、1980年に天然痘はWHOにより根絶が宣言され、種痘も廃止されたからである。

また、その頃は肺結核が「不治の病」、肺病」と恐れられ、小学1年時と中学1年時にツベルクリン検査というのがあった。ツベルクリン検査で陰性反応が出ると、BCG注射というのが待っていた。BCGワクチンを植えつけることによって、結核罹患への耐性を備えさせたためだ：

これだけの事例で現代と比較するのでは信頼度が低すぎるが、この比較例だけでも変化の大きさが感じられ、現代医療とはかけ離れた事情がわかる。その頃はまだ、がんはなかったのか、あってもあまり騒がれてはいなかった。がんを現代病と言っているのはその裏付けだ。くだんのツベルクリンの検査制度は、15年も前に廃止されている。

それでは、現代の医療は？という設問に戻ろう。設備、機器群を見れば、最新鋭のシステムがずらりと並び、各診療科ごとの専門医が適切な医療を施している。それゆえに、わが国の平均寿命は延びつづけ、世界でも有数の長寿国になった。ただし、がんやアルツハイマーなど今なお、手探りのな対応を迫られている現状もある。

インターネットやSNSが普及した現在では、医療情報の広がり方も変わった。医療事故や医師の過失は即座に取りざたされ、過去には外に出ることのなかった、ある意味では誤診も明る見に出るようになってきた。これを見ると情報の伝達の速さは、良くも悪くも

医療を加速度的に発展させた要因の一つであろう。

## そして現代から未来への医療を考える

こうした現実を踏まえて、近未来の医療を考えるのが我々に与えられた使命といってもいい。一つのサンプルと取り上げて将来はどうなるのを考えれば、おぼろげながらも先のこと占えるかもしれない。

というのは、医療も一気に変化するわけでなく、一步一步の前進の積み重ね、そのためには現在の延長上で考えるしかない。

よく言われるのは、少子高齢化で、総人口減少と高齢者の人口比率増加だ。「人生百歳時代の到来」ということばもつぶやかれる。それなら、百歳になっても元気で生きられる方法はないのか、そのために必要な健康管理や求められる医療とはどんなものなのか。

こういう課題への解決策は、単純に考える方がベターだろう。いくら考えても何の結論も出ないくらいなら、それこそ時間の浪費にすぎない。それより、一つでも具体案を考えだすに越したことはない。

高齢化社会の到来となれば、「課題百出」といわれる。その心は何かといえれば、医療・介護が追いつかない、誰が年寄りの面倒を見るのか、などという疑問が叫ばれ続けている

る。加えて、働ける医師や介護者不足、面倒を見られる人より見るほうが圧倒的に少なくなるという心配。だが、こういう時代が一気に来るわけではない。

それに、ものは考えようだ。観点を変えれば、違った解決策が出てくるかも知れない。つまり、高齢化を味方につけるにはどうすればよいのか、と考えてみるのも一法だろう。

たとえば、勤労年代の延長や年金受け取り年代のスライド、それより、健康年齢の延伸とQOLの向上など。挙げ連ねればきりがないほどだ。理想は「長寿でかつ健康」などで、そのための方策を考えればよい。

目標が明確であるなら、対応策を考えやすい。心配や不安を掻き立てるだけでは、何一つ具体策が出てこないことを、肝に銘じておくべきだろう。これは医療機器の新規開発や導入に通じるものがあることを付け加えておきたい。

## 広がる医療とその課題

早速、具体案の策定を目的として、まずは現代医療の分析から始めてみよう。

実際のところ、過去を顧みること、現実を見つめること、そして、その結果を踏まえた形で未来を志向してみたい。現実を重視した現在の延長線上に、未来へ向けての絵を描くことが理に適っている。

ところで、現時点での医療は、過去からの膨大な遺産や財産の上にある。これを無視して、夢のような話を創り上げても、それこそ「砂上の楼閣」が築き上げられてしまいうに等しい。それより、現実を見つめ、確固たる土壌の上に実用的な建造物を仕立て上げるべきなのだ。

それでは、これからの医療はどうすべきか。前例でいうなら、「がん対策」であり、「アルツハイマー対策」である。さらには、現代人が抱える「メタボ対策」のための医療や健康管理のあり方の模索かも知れない。また、心筋梗塞、脳卒中などの深刻な疾病予防策もあるだろう。また、エイズや新種のインフルエンザなど、これまでにない新疾患への対応も重要だ。

一方で精神的疾患への対応も必要となる。現代社会では、物質的には満足な生活ができているとしても、それが必ずしも肉体的・精神的な満足と結びつくとは限らない。疾病予防、健康維持のための医療は、さらに追及されるべき状況にある。

確かに、昔と比べれば現代医療は雲泥の差がある。しかし、まだまだ満足とは言いが切れない。医療スタッフの不足、医療費の高騰、地域格差の拡大…などなど課題は山積している。もちろん、これらのすべてを満足する理想論を追い求めても意味がない。だが、一つでも二つでも、満足できる医療が確立されることは、万人の要求でもある。

いふなれば、求められる医療の質の向上(QOM: Quality of Medical)は常に拡大す